

新
歌人群像

九条武子

われみづからがくるしみの壺

日高堯子



緋房の襖は閉されて

緋の房の襖はかたく閉されて今日もさ
びしく物おもへとや

【金鈴】

【金鈴】は大正九（一九二〇）年六月に竹
柏会より刊行された。九条武子三十三歳の
時の、そして生前唯一の歌集である。この歌
集は、緋房の襖の奥に憂いを秘める麗人の魅
力をもって、当時大ベストセラーとなった。

九条武子は明治二十（一八八七）年十月二
十日、京都西本願寺二十一世宗主大谷光尊
（明如上人）と側室藤子との次女として生ま
れた。この母のもと四人の兄と一人の姉があ
り、武子は末っ子である。本願寺の歴代は、
正室とは別に側室をもつことが習いとなって
おり、正室枝子と光尊との間には一女義子が
ある。武子はこの枝子を母と呼び、生母を
「ふじ」と呼んで育ったという。

「もの心ついた頃、私の住居は父母の許か
ら長い／＼廊下続きで、大きな二枚の杉戸の
あつた入り口を覚えて居る。皆北の御方と呼
び馴れて居つた一棟の家が、子供達雑居して
入れられてをる所、小さな丸鬚を頭にのつけ
たお婆さんで、何んでも出来るこはい女中が

全権を委任されて居った」。(その後) 私は義姉の壽子が住んでをつた百花園といふ建物に移された。そこは邸内でも北の端で、父の許まで一層遠く、(略) 古い習慣と一種妙な空気に包まれた家庭では、庭に出るのさへ一人ではゆるされなかつた」(『無憂華』)

名門と呼ばれる人々の生活は、戦後の日本しか知らずに育つた者には遥かに想像のおよばぬものがあるようだ。しかも武子の生家は西本願寺宗主大谷家という特殊な家柄でもあつた。文字通り高貴な家の深窓の令嬢は、くわえてきわめて美貌であつた。その容姿は母藤子のほつそりとした長身の美しさをよく受け継いでいたというが、父光尊もまた周囲を圧倒するような美男子だつたという。写真を見ると兄の光瑞も端正な堂々とした容姿であり、一族は人々の視線を集めるにふさわしい美しい名門一族であつたのだろう。そしてこの美しさが、歌人や宗教人としての武子のスター性を、いやさらに高めたことは間違いない。

武子十六歳のときに最愛の父光尊が病死。兄の光瑞が法主を継ぐと、武子は裏方の壽子とともに仏教婦人会本部長として伝道活動の任を担うようになる。日露戦争をはさんだ数年の頃である。そして、明治四十二(一九〇九)年、武子は二十二歳で男爵九条良致と結

婚する。良致は兄嫁壽子の弟であつた。

つめたかりけりこの身この胸

武子と良致とが新婚早々に別居生活に入つたのは何故だつたのか。謎は封じられたままだ。新夫婦は結婚三か月後にヨーロッパへ旅立つのだが、ハネムーンというべきその船中において、すでに不和の気配が濃く漂つていたという(末永文子著『まぼろしの柱ありけり 九条武子の生涯』)。下船まもなく二人は別居の形になり、武子はロンドンのケンブリッジ大学に留学する良致を置いて、ほぼ一年ぶりで単身帰国。夫良致の留学は三年間という約束ながら、実はそれから延々十年あまりにも及ぶのである。

みわたせば西も東も霞むなり君はかへらずまた春や来し

『金鈴』

かりそめの別とききておとなしうなづきし子は若かりしかな

へだたりておなじ月みる君とわれ人間の身はいとかひもなし

御消息くるによしなしさながらに流人の如きわびしさにをり

ゆきずりの人よりもなほ冷やかに瞳かへして物のたまはず
焰なす緋の衾身を包めどもつめたかりけりこの身この胸

『金鈴』には、ひとり日本に残された新妻の孤愁が色濃くにじんんでいる。ことばは優美だが強く、清怨の情が流露する。「ゆきずりの人よりもなほ冷やかに瞳かへして物のたまはず」とは、ある日の夫の素顔だろうか。不和のまままざと見える歌だ。だが、『金鈴』にはこのような夫の表情がつぶさに見えてく



兄・光瑞・壽子夫妻(右)と、良致・武子夫妻(左)

九条武子



大正天皇の即位式に際して（一九一五年）

る歌はほとんどなく、まして愛の熱情は皆無
といつてもいい。「流人の如きわびしさ」に
は、諦めの冷感さえ読み取れる。「焔なす緋
の衾ふしなま」に包まれた武子の「この身この胸」の
「冷え」は、遠い夫へではなく、むしろ読者
のほうへ投げ出されているというべきだろう。

武子は帰国後の一人居の孤独感もあってか、
佐佐木信綱に会い、大正五年に「心の花」の
竹柏会に入会して本格的に歌をつくり始める。
またもう一方では、仏教婦人会本部長として
精力的に全国を巡回するようになる。

もとゆひのしまらぬ朝は日ひと日わが
髪さへもそむくかと思ふ
『金鈴』

するく〜と衣桁の衣のおちて又もとの
沈黙しじまにかへる春の夜

たたけどもたたけどもわが心しらずビ
アノの鍵盤かぎばんは水の如し

満身の血潮は冷えて閃くは水のごとき
理の刃のみ

生るるも死するも所詮ひとりぞとしか
おもひ入れば煩惱もあらず

苛立ち、孤独、沈黙、諦観——心の動きが
感情を迸らせ、ことばを激しく駆りたててい
る。だが、そのうねりや喘ぎは、見てのとお
り、たちまち「沈黙」や「氷」や「理」に
鎮まっていくのである。ここに武子の資質が
明らかに見える。武子は情の人というよりは、
理性の人というべきだろう。理性的であるが
ゆえに、孤独と冷感もまた深い。

ともあれ、高貴な出自と美貌にくわえて、
夫に置き去りにされた憂愁の新妻という伝説
を伴って、「金鈴」は武子を一躍スターに押
し上げた。世人はこぞって悲劇の麗人の面影
をもとめ、歌集は売れに売れたという。その
『金鈴』ブームに最もきつい、長い批判を浴

びせたのは、外ならぬ与謝野晶子であった。

晶子は『金鈴』が旧派の歌からある程度脱
していると認めながら、明星派の「イミタシ
ョン」の匂いが強いと暗にいい、「著者の生
活態度には弱い所があり、中途半端な所があ
り、妥協的な所があります。一言にして云へ
ば、自己を愛することが足りません」。歌は
要するに生活です。著者の歌に誰でもなつか
しく思ふ真率な美質がありながら、『金鈴』
の程度の生活に停滞して居られては遺憾で
す」（『婦人公論』大正九年九月）と痛烈に切
った。反戦詩「君死にたまふこと勿なれ」を書
き、ことばに生命を張っている晶子には、
『金鈴』は生ぬるかかったろう。文学的な見地
からの新しさは特になかったからである。

銀の鈴金の鈴ふり天上に千の小鳥は春
の歌うたふ
『金鈴』

ひたふるにおもひせまれば梟は山へ山
へとわが魂さそふ

紺碧の波の底よりうきいでしわれとし
思ひ春の海みる

だが、ここにあるような、天上や山や海な
ど遙か久遠への清らかな、無心の憧れに、私
はふと目を止める。ことばの源にある祈りや
信仰に近い思いには、晶子が促す自我の目覚

めとはまた別の世界がある。

海にいでたるわがひるの夢

昭和三（一九二八）年二月七日、武子は敗血症のため四十一歳で急逝する。

『金鈴』を出版してよりの武子は、歌人や随筆家として文筆の幅を広げるが、それ以上に宗教家、社会事業家としての活動に漕まじ

いものがある。伝道のための全国巡回をはじめ、東山女子専門学校創立、保護少女教育感化施設創立、関東大震災後の貧民救済事業、慈善病院のあそか病院建設など、社会福祉の分野で大きな仕事を次々こなしていた。夫が



京都仏教女子青年会の歳末の街頭奉仕活動での武子（中央）（1927年）

帰国した後も家庭に籠もることなく、行動的
女性であったことは間違いない。その繁忙な
仕事に死病を招いたという観さえある。折か
ら時代は、与謝野晶子、平塚らいてう、柳原
白蓮などが華やかに社会に出る《女性の時
代》の幕開けでもあった。武子もまさにそう
いう行動力をもつ一人として、世の人の熱い
視線のもと、時代が求めている女性像を体現
するスターだったのである。

繁忙の日々の中で、旅の中で、武子は多く
の歌を残している。彼女はあの日ある所の心
や景色をすばやく歌に写し取るという才能に
長けていたようだ。それはおそらく、どんな
現実の中でも摩滅してしまわない強い自己と、
鋭敏な詩的感性を、常に確実に秘めもって
いたことの証だろう。『金鈴』以後、一種の
宗教的な観念歌と自然詠に、独自の世界が開
けてくる。その途上の早い死であった。

なにをもちてけふといふ日のあらはれ
しひがしの空の見のうつくしき『無憂華』
まぼろしの柱ありけり女あまた命をか
けてやすらひよれり
大いなるものゝ力にひかれゆくわが足
あとのおぼつかなしや

この胸に人の涙もうけよとやわれみづ
からがくるしみの壺
『白孔雀』

宗教的な思念の強い歌である。武子は、家
を捨てて新しい自我をもとめた晶子や白蓮と
は異なり、いわば生れという宿命に身をゆだ
ねる形で、名門の誇りと責任とを見事に生き
切った女性であった。その地点から見た人間
の苦悩や自己の生への深い思索は、宗教的な
色合いを濃くふくみながら、しだいに自然の
生命とも融合していく。最後に、死後出版さ
れた二歌集『薰染』『白孔雀』から、自然の
相が魅力的な数首をひいて文を閉じる。

原一めん生ひつづく薄うち伏せて王者
の如もすぎゆく風か
『薰染』
天塩広野雨けぶらへば果もなう海にい
でたるわがひるの夢

けむりはく十勝の嶽の上にしてまさを
き空はいよよすみたり
ゆるらゆるら黒牛はゆく桜ばな散れど
もちれど知らずげにゆく
明日越えむ乙女峠のうしろより絶えず
わきあがる午後の雲白し
『白孔雀』

（ひたか・たかこ「かりん」編集委員）